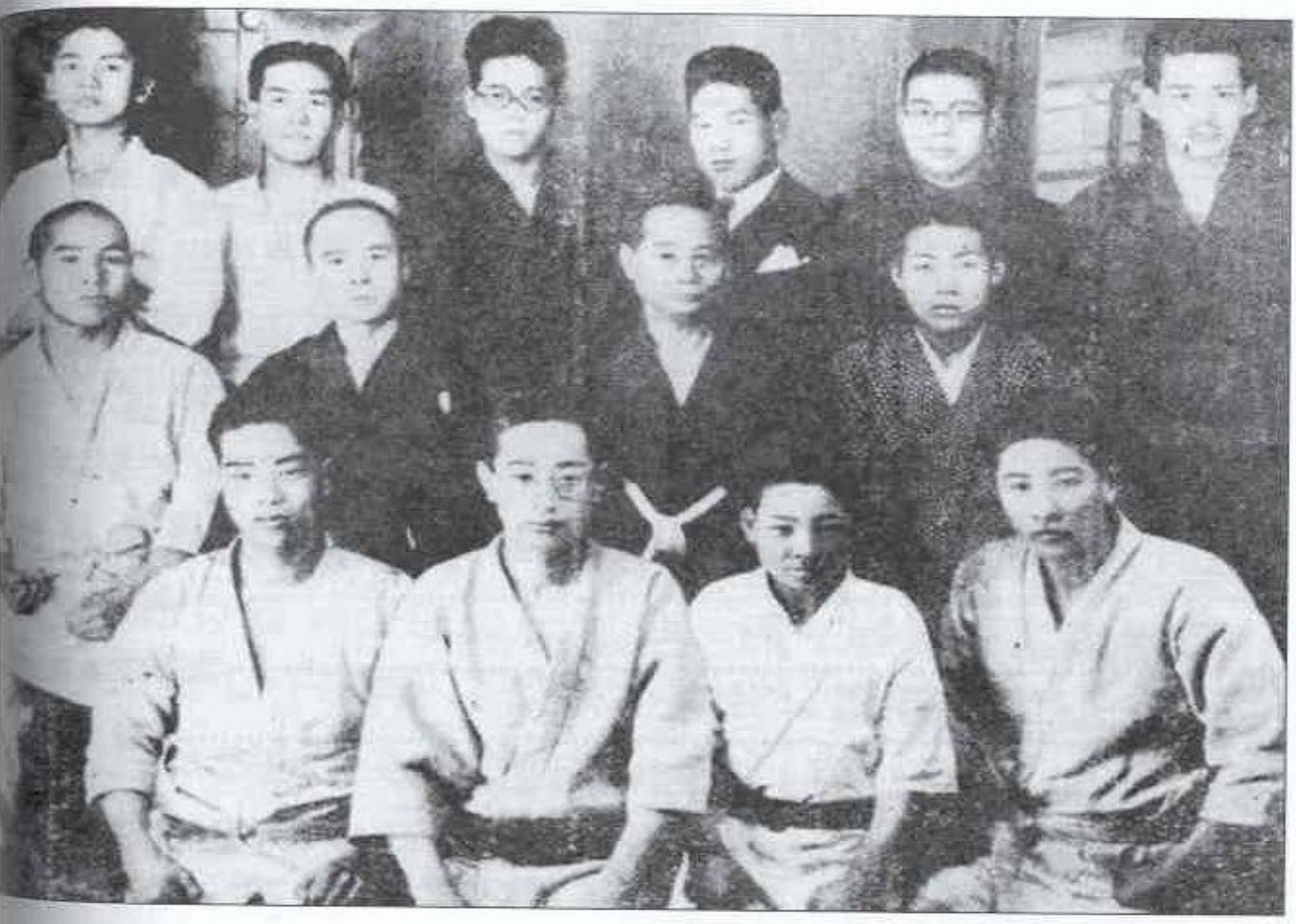
# 本部朝基と琉球カラテ

岩井 虎伯



右より上段＝松村君、柔道三段林君、田中君、原君、石井君、小畑君。
中段＝助教師山田君、著者本部会長、幹事長杉本得二君、柔術師範上島君。
下段＝中島君、飯田君、岩井君、深江君。

本章での、『第一章　私の唐手術』と重複する部分は割愛しました。

# 組手について

琉球の憲法唐手は基本と組手の二ツに頒つことが出来る、基本とは唐手の基をなすものにして俗に型と構え初心者にもこれをよく教えるのであるが組手は柔道に於けるキメの型にや、似て一駒づつ連続的になって居り手を組むという語源から転訛して組手と称するようになったものと思われる。尤も組手は琉球に於ては古来より行われたのであるが未だ制定した型というものはなく尚文献にも残っていないのである。そして組手に対する参考書と称するものもその多くは支那の武人が編成したものを書写して武人仲間に珍重がられたもので琉球独特の組手は実に未だ編成されていないのである。

前組手とは前にも述べた通り手を組むという意味が転訛したもので一通り基本の教習を卒えた人が互に受けはずしを試みて、それが組手と称さる、様になるのであるが元来が唐手は剛柔であるため其の技が未だ充分でない人には試みることすら危険が伴うため自と技が上達するに従って組手というのも相手を選びて稽古することが出来るので琉球の組手はかくして伝統的に伝えられたものである。そのため人に依って色々変化をするものであって決して制定した組手の型というものはないのである。

されば組手を稽古せんとする人は常に敏捷を旨として相手を選びよく「受けはずす」ことを稽古すれば自と組手の稽古をしたということになるから自らの技の上達を期するのが尤も肝要なことであろうと思われる。

# 本部朝基の組手図解

## 一本目

2　前図に於て、敵が左拳にて我顔面へ突き来るを我右手にてふかく敵の左腕の所に受け外すと同時に、我左手にて敵の右拳をさゝえ止める。

1　双方相対せる時の一種の構え。

ここに掲げる十二本の組手は、現在も日本空手道本部会に於いてナイファンチと共に、朝基十二本の組手として、継承鍛錬されているものである。

1　敵が右拳にて我顔面へ突き来るを、我左手にて打ち外す形。

一本目

3　前図に於て、我右手にて敵の左拳を受け外すと同時に、受けた我右肘にて敵の左胸部へ突き込む。

3　同前図に於て、我右手にて敵の左腕を掴と同時に我左手は敵の右手首を引き掴むや否や我左肘膝にて敵の睾へ突き込む。

2　前図に於て、敵が右拳を打ち外されると同時に左拳にて再び我顔面へ突き来るを、我は右手にて敵の左腕を掴と同時に我左手は敵の右手首を引き掴む。

2　前図に於て、敵は我顔面に隙あるを見て左拳にて突き来るを、我は睾にあてた右手にて敵の左腕肘の所にて受け外す形。

1　敵が右拳にて我顔面へ突き来るを、我左手にて受け外すと同時に敵の左手首を掴み、同時に我右手は敵の睾を掴む。

三本目

1　図の如く双方相構え、隙なき場合、我右拳にて敵の顔面を裏打ちせしに敵の右手にて受けられたる形。

# 四本目

3　前図に於て、我右手にて敵の左拳を打ち外すと同時に、我右肘にて敵の胸部へ打ち込む。

1　敵が左拳にて我顔へ突き来るを、我右手にて受け外す形。

五本目

2　前図に於て、敵に受けらるゝや、我右手にて敵の右肘を押し開くと同時に、我左拳にて敵の右脇腹を突く。

1　敵が右拳にて我顔面へ突き来る時、我左拳にて打ち外すと同時に敵の顔面へ突き込む。

## 六本目

2　前図に於て、敵が左拳を受けられると同時に右拳にて我胸部へ突き来るを、我は敵の左拳を受けた右手にて之を受け外すと同時に、我左拳にて敵の顔面へ突き込む。

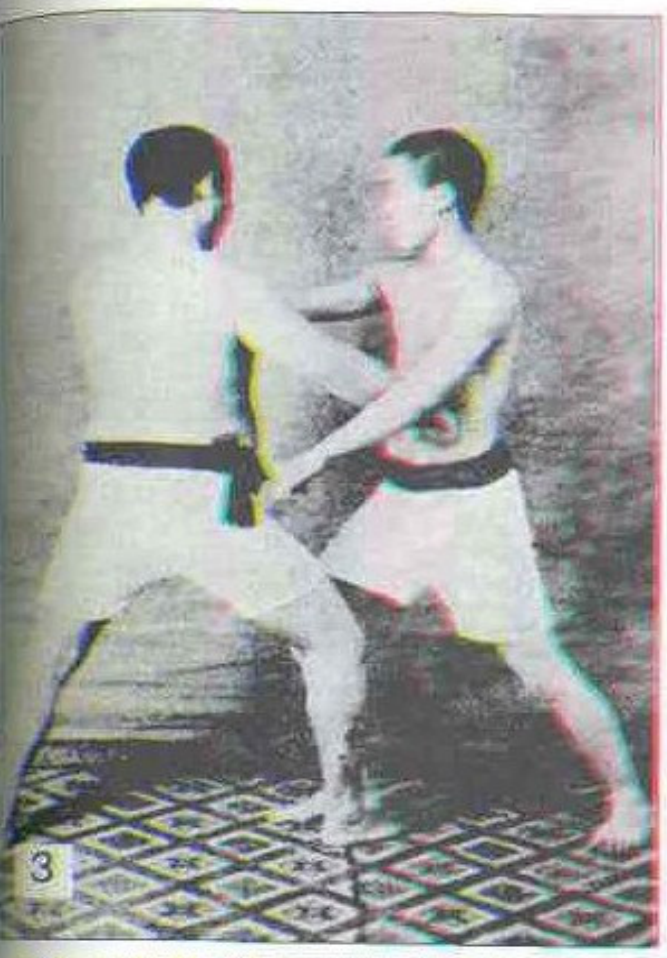
3　前図に於て、我左拳にて敵の左拳を打ち外すと同時に我左拳を以て敵の顔面へ打ち込みしを、敵はひるまず受けられし左拳にて我左拳を引き外す形。

2　前図に於て、我左拳を敵の顔面へ打ち込みしを敵はひるまず左拳を我顔面へ打ち込むを、我は左拳を引きて打ち外す形。

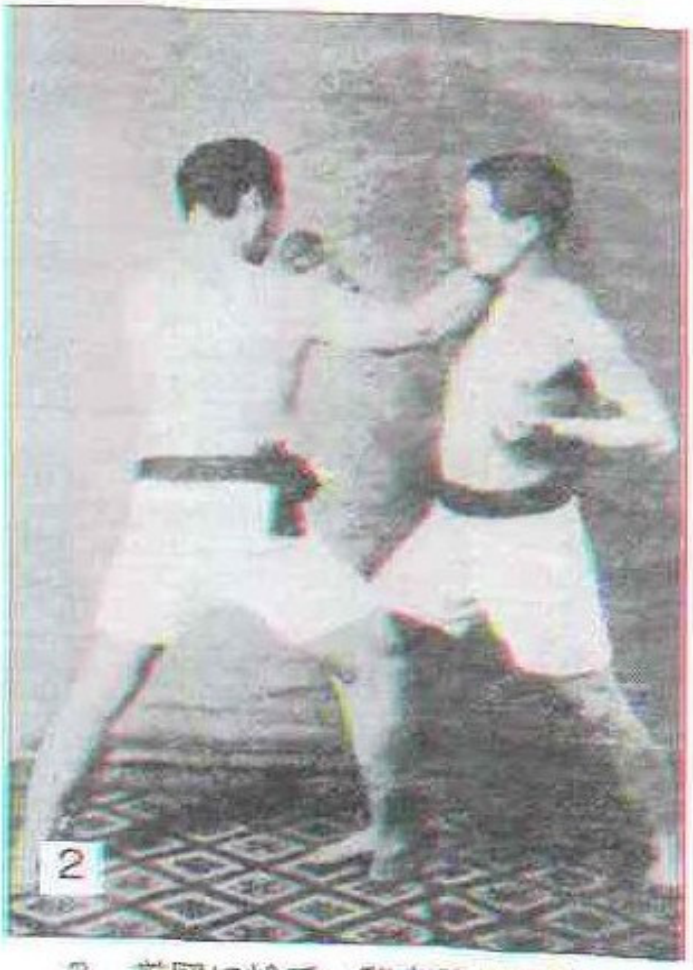
1　敵が左拳にて我胸部へ突き込むを、我右拳にて受け外す形。

# 七本目

4　前図に於て、敵が左拳にて我左拳を引き外さんと、自己の左拳を引き同時に体をひねらんとするを、我はひるまず右手にて敵の左肘を掴み押し、同時に我右足を敵の左足後に踏み込み、左拳にて敵の左脇腹へ突き込む。




3　前図に於て、我右拳を敵の首へ打ち込みし時、敵ひるまず我右脇腹へ突き込むを我右肘にて払い同時に敵の左脇腹を突く。




2　前図に於て、我右手にて敵の右拳を打ち外すと同時に、我右拳を敵の首に打ち込む。

2　前図に於て、敵の左拳を我左拳にて受け外すと同時に我左手をひねり、敵の左手首を掴み我右手は敵の左肘を掴と同時に、我右足にて敵の左膝を踏み挫く。

1　敵が左拳にて我顔面へ突き来る時、我左手にて敵の左拳を打ち外し、同時に我左手にて敵の左手首を握る。

八本目

2　前図に於て敵が怯まず左拳にて我顔面へ突き来る時我右手にて敵の左腕を掴み同時に我左手は敵の右腕をも掴み我右膝にて敵の鳩尾へ突き込む。

1　我顔面へ突き来る敵の右拳を、我左拳にて打ち外すと同時に敵の顔面へ突き込む。

九本目

1　敵が左拳にて我顔面へ突き来るを、我右手にて打ち外す形。

十本目

3　前図に於ける場合、敵が腰を引き退かんとする時、敵の両手を引き込むと同時に、我右足にて敵左膝を踏み潰す。

3　前図に於て、我左拳にて敵の左肘を突き挫くも敵はひるまず右拳にて再び我顔面へ突き来るを、我左手にてこれを受け外すと同時に、我右手は敵の左手首を引き掴む。

2　前図に於て、我右手にて敵の左拳を打ち外すと同時に、我左拳にて敵の左肘を下より突き挫く。

5　前図に於て、我右手にて敵の左手首を掴み、我左拳にて敵の右拳を受け外すと同時に敵の顔面へ打ち込むを、敵はひるまず体を引きこれを避けんとするを、我はすかさず左肘にて敵の胸部へ突き込む。

4　前図に於て、我右手にて敵の左手首を掴み、我左拳にて敵の右拳を受け外すと同時に敵の顔面へ打ち込む。

## 十一本目

1　双方接近せし時、敵が右拳にて我顔面へ突き来るを、我右手にて敵の右拳を敵の右肘の所にて打ち外すと同時に、我左拳にて敵の右脇腹へ突き込む。勿論此場合は双方接近せる為、我右は敵の右肘の所を打ち外し得るを以て、我左拳は敵の右脇腹へ打ち込み得るものと知るべし。

## 十二本目

1　敵が後より両手にて抱きしめるを、我右手にて敵の両手を強く掴み、同時に左手にて敵の睾を掴む。

# 心得となるべき治療法

唐手は人も知る如く剛術で、試合の時なぞ一度に急所を突いてよく相手に致命傷を負わすことがあり、稽古の時でも（組手の時は）お互いによく注意していても誤って傷を負わすことが間々ある。だから稽古者は「打ち傷」及び「打撲傷が原因をなして喀血をする時の療法」等心得ておく必要があると思うから茲に家伝の治療法を詳述して一般の心得に供すること、する。

## 蘇生術

唐手術の試合勝負は勿論、稽古中といえども誤って或は打ち或は突き其のため気絶せしむることあり、然しながら諸機関に絶対的の損傷を与えざる限り、此法を施せば必ず蘇生せしむることが出来得るのである。

この施術方法は種々あるも比較的効果の顕著なるものを述べんに、先ず、假死者を仰臥せしめ胸腹部の衣帯を解き、胸腹部を両側に押し開き、両手を以て数回撫で下ろして空気を充満せしめ、然る後頭部を先に起して患者を平座せしめ、我右膝頭を以て患者の脊椎十一節に押し当て左足は跪座し、患者の頭部を前方に垂れざるよう我肩鎖骨前部にて支え、左右の手は臍下一寸両側一寸二分の個所にて指部を組み掌小指側を以て内方及び上方位へ圧を加え其の瞬間に弛緩せしむ。

蘇生の理由は鵞骨動静脈分岐部、腹腔内臓器及び横隔膜に通じ刺激を与え心臓の鼓動を促し、以て全身の管能を復活せしむること、なるのである、此方法は仰臥せしめたま、で施すことも出来る場合もある。そうして施術の際に必ず誠心誠意神仏の加護を祈り鬼神をも挫く意気を以て之に臨まねばならぬ

## 骨折、脱臼治療法

患者を適当な位置において患部の上部を動かないようにし施術者の手指及び患部を消毒して筋を弛緩せしめ患部上下の両端をつかんで一方に即ち抹消部へ充分に牽引すると同時に反対の方へ牽引して転移せる骨片、骨頭（骨折は骨片、脱臼は骨頭）を生理的位置に復するよう直圧を加え、然して発熱ある場合は湿布して副子副木を要する時これを当て動かさるよう包帯なし、経過如何により筋其他の強直を防ぐ為に適度の摩擦法及他動的若しくば自動的運動を促すことが肝要である。

### （一）打ち傷（琉語ではウチチ）の療法

山羊の肉を四五斤位を、九年母のスイ気のある汁でひたし、九年母の汁が肉より五分位上になる程度の分量を煎じて汁が半分ほどになった時、火より下し山羊の肉と共に両三日食するか又は山羊の肉のない土地では四五斤位の鶏の肉を骨も一所に酢で鶏肉がひたる程度にショーガ一合を混じてよく煮沸させ汁が半分ほどになった時、火よりおろして両三日食せば屹度治療することが出来る。

尚この酢とショーガで煮た鶏肉の汁は睾丸を蹴られて腫れあがった時も二三日食せば屹度治療す

ることが出来るのである。

（二）打撲傷が原因となって喀血する時の療法

四五斤位の家禽を骨も肉も共に諸白一合でよく揉み、それに水を家禽のひたる程度にいれてよく煮沸させ、これ亦汁が半分位になる迄よく煮て、両三日家禽の肉もろとも食せばよい。尚この家禽の汁は肺を冒された人にも非常に効目のある療薬で肺の悪い人（肺結核の初期位）がこれを毎月、二三回宛か、さず一年ほど食用すれば著しいほど肺を丈夫にし健康を増進して見違える位、肥えるのである。

（三）打撲傷が原因となり病気を生じた時の療法

百合の芋を摺鉢にいれて摺小木でよく粉にし、それを酢のきついのと混じて「ユジミチンキ」を塗布する様に患部に塗布る時は三四回にしてよく治療することが出来る。

（四）打ち傷が発生して困る時の治療法

単に酢に豆腐をひたし三、四日毎日続けてその汁と共に食せば屹度いたみを去り全治することが出来る。

（五）切り傷の治療法

蝸牛（かたつむり）または「タニシ」を摺鉢（すりばち）にいれて摺小木（すりこぎ）でよく叩（たた）きつぶし、蘇鉄（そてつ）の油と共によく混じて塗る時は直ちに出血をとめ立ち所に治療することが出来る。

尚以上述べたる外にも色々治療法はあるけれども漢方医の用いる簡単な調剤法を一二録して斯道

の研究家の心得に供せんと思う。

打撲傷及び瘀血を治療するのに用いる鶏鳴酸を酒に浸した大黄五匁に帰尾（トーキの尾部）五分、桃仁（桃の種子）七分と共に粉末となして煎じて鶏鳴の頃、服薬するもので桃仁は皮を剥いで用いるのである。打撲傷の痛みを止めるのは乳香（一銭）に投薬一匁目、帰尾（トーキ）一匁目、赤芍（赤い芍薬）一匁目、白芷一匁目、川芎一匁目、生の牛地一匁目、丹皮（牡丹の皮）一匁目及び甘草一匁目を粉末として酒に浸し毎服三匁目宛服用か又は蘇木三匁目、紅花（沖縄ではチワダという）三匁、帰尾三匁目、大黄三匁目をこれ又粉末にして温酒に混じ一回に三匁目位ずつ服用したら三四日にして全治することが出来るのである。

の研究家の心得に供せんと思う。

打撲傷及び瘀血を治療するのに用いる鶏鳴酸を酒に浸した大黄五匁に帰尾（トーキの尾部）五分、桃仁（桃の種子）七分と共に粉末となして煎じて鶏鳴の頃、服薬するもので桃仁は皮を剥いで用いるのである。打撲傷の痛みを止めるのは乳香（一銭）に投薬一匁目、帰尾（トーキ）一匁目、赤芍（赤い芍薬）一匁目、白芷一匁目、川芎一匁目、生の牛地一匁目、丹皮（牡丹の皮）一匁目及び甘草一匁目を粉末として酒に浸し毎服三匁目宛服用か又は蘇木三匁目、紅花（沖縄ではチワダという）三匁、帰尾三匁目、大黄三匁目をこれ又粉末にして温酒に混じ一回に三匁目位ずつ服用したら三四日にして全治することが出来るのである。

# 本部朝基・略歴

本部朝基翁は、幼名を三郎、綽名をサールー（猿）と称す。明治三年四月五日、沖縄県首里市赤平村本部按司の三男に生る。

幼にして武を好み、十二歳の時より長兄朝勇氏と共に糸洲翁を其の宅に聘し、正式に唐手の稽古を為す、長ずるに及び、更に佐久間、松村の二翁に師事し、尚組手に至りては右三氏の外、松茂良其他当時斯界に名ある武人は総て之を訪ねて教えを乞い、或は実地に立合い、専ら斯界の研究に没頭す。当時の氏は、「武是れ我れ、我れ是れ武」の外に他念なく、従って其の修業振りも到底常人の企及し得ざる処にして、寒中と雖も夜具を用いず、若し、それ寒さを覚えれば起きて型の稽古を為し、暖まれば床に就くという有様、或は亦組手に関する疑問あれば、寝食を忘れて工夫し、悟れば直に師を訪ねて実地に立合い、困難辛苦、以て其の練磨を怠らざりしと云う。

宜なるかな、二十四五の氏は既に武名赫々として、サールーと言えば誰知らぬ者もなく、人をして三舎を避けしむ。氏は今や齢老境に入る。而も尚矍鑠として子弟の養育に従事せらる。

余は、極めて、最近の知友に過ぎずと雖も、謙譲にして恬憺なる益々敬愛惜くあたはざらしむるものがある。若し、それ技量の点に至りては、既に世人の熟知せる処、敢えて吾人の贅言を用せざるべし。

（漢那朝常）